校長室通信

令和6年11月19日号

志免町立志免西小学校

高良 祐治

学校は、全校で取り組むことや各学級で取り組むことなど、様々な活動があります。「元気な声で挨拶をしよう」「チャイム席を守ろう」「修学旅行で6年生が長崎の平和公園に行くので、全校で折り鶴を折ろう」等々…。これらの活動には当然ながら目的や意味があります。しかし、気がつくとも我々教員は「そういうものだから」「毎年この季節にしてきたから」と当たり前のように子どもたちにやらせていることがあります。また、子どもたちも「先生がそう言っているから」「やらないと怒られそうだから」と深く考えずに何となく活動していることも多いようです。今回は、授業の始まりと終わりの挨拶について考えたことをお伝えします。

敬意と感謝

日中、廊下から各教室の様子を見てみると、どうも授業の始まりと終わりの挨拶の仕方が気になります。始まりの挨拶では、日直が号令をかけているのに、まだ引き出しから教科書などを出しながら「お願いしまーす」と言っている子ども。終わりの挨拶では、「ありがとうございました」の「ございました」の部分ですでに立ち上がっている子ども…。

このような子どもたちは、授業の始まりや終わりの挨拶を形式的に行っているだけで、その目的や意味は意識していないのだと思います。

教育哲学者に森信三(1896-1992)という人がいます。彼は著書の中で、「礼はその内面の敬の心の現れ」と述べています。子ども一人一人の中に、自分の成長のために新たな学びへと導いてくださる先生への敬意や、話合いの発言などで新たな視点や考え方に気づかせてくれた共に学ぶ級友への敬意や感謝の気持ちが、この礼の姿に現れるということです。

このような気持ちを持って授業の始まりの挨拶をした子どもたちは、集中して学習に取り組むことができるでしょうし、終わりの挨拶のあとには、すっきりと充実感のある表情になっているはずですよ。

新型コロナウイルス感染症の影響で、全員がマスクをし、声を出すことが憚られる期間が長く続いた影響で、このような挨拶をすることや返事をきちんとすることなどが、ややいい加減になってしまっている現状があるのかもしれませんが。また、効率化やコストパフォーマンスが求められる現代社会で、このような道徳文化が当たり前ではなくなっているのかもしれませんが。しかし、社会生活を送っていく子どもたちに“今”身に付けておいてほしいことだと思っています。

まずは私たちから

後期から本校では、午前中4時間、午後2時間の時制に変更しました。これは、授業と授業の間に休憩や次の授業の準備時間を設けることで、心と体を前の時間の学習から次の時間の学習に切り替えができるようにするためです。

始業のチャイムが鳴ったときには、席に着いておくことはもちろん、机の上には学習準備が整っていることが必要です。その上で、先に述べた敬意と感謝の気持ちで、学習の始まりの挨拶を行い、新たな学びへと挑んでいってほしいと思っています。

そのためには、まず私たち教師が子どもたちに誠実に向き合えなければならぬと思います。始業のチャイムが鳴るときには、教卓の前に立ち、子どもたちをあたたかいまなざしで見渡し、「さあ！共に学びましょう」という態度を示さなければなりません。チャイムが鳴っているのに席に着いていない子どもがいたり、挨拶がいい加減になってしまったりしているのは、教師の授業に対する日々の構えが影響していることを、我々教師が戒めとしなくてはならないのだらうと思っています。

年度当初は、子どもも教師もお互いにある程度の緊張感があり、きちんとできていたことも、日が経つにつれ、だんだん馴れ合いになってきてしまいがちです。学年の折り返しも過ぎ、子ども同士の間関係も成熟し、学びをますます充実させるべきこの時期に、足下を今一度見つめ直す必要があると感じる今日この頃です。

今回は、授業の始まりと終わりの挨拶を例に、活動の目的と意味についてお伝えしました。ご家庭でもお子さんと話題にさせていただけるとうれしく思います。